

政治は男の道楽か

盛田 常夫

大連立で揺れた日本の政界。いろいろな論評はあったが、一番面白かったのは、朝日新聞に掲載された辛酸なめ子女史の評。「男どもが勝手に盛り上がったたり下がったりして、一喜一憂している。ふつうの人から見ると、浮世離れしている」。言い得て妙だ。要するに、「政治は男の究極の道楽」なのだ。

権力ゲームという道楽

実際のところ、大連立の仕掛け人はみな道楽でやっているのではないかと疑いたくなる人物たちだ。日本では首相を辞めても政界を引退しないで、「一兵卒に戻る」。横綱が引退して平幕になるようなものだから、これは何となくしっくりこない。安倍晋三などはもう総理などこりごりだろうが、多くの首相経験者は血の気が多いから、かんたんに権力の中樞を離れられない。いや離れることができない。だから、派閥の長や大勲位になって、キングメーカーの裏仕事に生き甲斐を求める。こうして、残りの政治家人生は権力ゲームを遊ぶ道楽になる。

渡辺恒雄に限らず、戦後の日本では、政界に籍を置かないが政治家との付き合いが長く、ビジネスやメディアに力をもっている人物が、黒幕として政治を動かそうとしてきた。しかし、この現代にあって、渡辺のように80歳を過ぎた老人が、プロ野球から政治にいたるまで口出しするのはいただけない。読売は渡辺の持ち物でも何でも無いはずだ。一介の政治記者出身の「実力者」が、オーナー社長のように振る舞い、挙げ句の果てに政権にまで口出しするのを許す読売は、企業として正常か。何時まで老人の道楽を許しておくのか。

それもこれも、皆、「実力者」が俗世を捨て切れなからだ。アメリカの大統領は職を去れば、一介の市民になる。民主主義とはそういう

ものだろう。どんなに個人的な力があっても、一つの社会的機能や役割を終えれば、一介の市民に戻る。これが交代制民主主義の基本だ。「実力者」が裏からちょっかいを出す仕組みは、民主主義とは相容れない。

日本も首相を経験したら、いつまでも権力の周辺にたむろするのではなく、一介の市民に戻ったらどうか。細川護熙を見習い、まともな趣味をもって余生を楽しむようにならないと、日本の民主主義も本物にならない。政治を老人の道楽にしてはいけない。

ハンガリーにも大連立？

さて、実はハンガリーにも大連立の話がある。昨年の大騒動の最中、FIDESZは専門家による臨時内閣の樹立を提案したことがある。これも一つの大連立の形態である。大幅財政赤字と内政混乱の中で、この提案はそれなりに意味をもつものだが、総選挙に勝利したばかりの社会党が簡単に権力を手放すはずがなかった。

昨秋の騒乱から1年経て、社会は落ち着きを見せているが、ハンガリーの政界は波乱含みだ。次の総選挙まで3年近い時間があるが、いろいろなアドバルーンが上げられている。

SZDSZのホルン・ガーボルは、自らのHPでFIDESZとの連立の可能性について触れた。中道右派と自由主義との連立があっても可笑しくないという議論だ。ただし、オルバン抜きのFIDESZという条件が付いている。これに呼応するように、デブレツェン市長でFIDESZの有力政治家コーシャ・ライヨシュがこれに肯定的な姿勢を見せたから面白い。

もともと、そもそもオルバンなしのFIDESZなど考えられるのか。オルバンなきFIDESZは、明らかに今のFIDESZとは異なるだろうし、現在のFIDESZの党組織はそれを許さない。

オルバン対首長

良くも悪くも、現在のFIDESZはオルバンが作り上げた党。オルバンはオーナー党首。皮肉なことに、反 Kommunismus を謳う FIDESZ の党活動スタイルは、ハンガリーの政党の中で昔の共産党に一番近い。オルバンの個人独裁で持っている政党だ。オルバンには「引退」という選択肢がない。この面から見ても、オルバンは古いタイプの政治家。だから、実力のある政治家とオルバンとの間には、微妙な隙間風が吹いている。

FIDESZ の有力政治家はこぞって、地方自治体の首長の地位を確保している。オルバンとの力関係を維持する上で、不可欠なのだ。党中央組織はオルバンが握っているから、異論がなかなか通らない。だから、自治体を権力基盤にして、オルバンに対抗するしか方法がないのだ。

このことはオルバンも分かっているから、ジュルチャーニが提案した首長と国会議員の兼職禁止は、渡りに船だ。地方権力をバックにする対抗者が、中央権力への道を断たれれば、オルバンの地位が堅固になるからだ。

この問題を含め、FIDESZ 内部のオルバン対首長政治家の戦いは、今後の FIDESZ を占う上で見逃すことはできない。

SZDSZ の焦りと政界再編

ホルン・ガーボルが FIDESZ との連携の観測気球を上げたのは、SZDSZ の支持が広がらないからだ。これまで社会党と連携してきたが、支持率が高まらないばかりか、不人気のジュルチャーニに引きずられて、SZDSZ の支持率も低迷している。さらに、SZDSZ が主導してきた健康保険改革が不人気で、社会党との関係までぎくしゃくするようになった。SZDSZ の自由化政策を支持する有権者は少なく見積もって 10% はいるはずだが、その支持を獲得するために、新しい路線が必要だということだろう。

ホルンの構想は、SZDSZ の古参党员や離党した知識人を代弁していると考えた方がよい。総選挙が近づけば、この動きは本格化するかもしれない。その時には、オルバンから袂を分かった

FIDESZ の政治家が加わって、新しい政党ができる可能性も否定できない。水面下でどのような合従連衡が企てられているのか。来年後半からこうした動きが表面化するかもしれない。

「ババ抜き」提案

MDF のダーヴィッド党首によれば、国内政治の混乱の元凶はオルバンとジュルチャーニだという。この二人が政界を引退すれば、ハンガリーの政治が正常化する。これが持論で、今のハンガリーで案外これに賛同する人は多い。

確かにジュルチャーニもオルバンもパラノイド型の人間。インテル会長に上り詰めたハンガリー人、アンディ・グローヴが「パラノイドだけが生き残る」という典型例のようなもの。

ダーヴィッドに呼応しているのが、国会議長のスイリ・カタリン。最近、Népszabadság 紙のインタビュー記事で、社会党指導部にたいして政策の転換を求めた。市場主義一本槍ではなく、社会党の理念にもとづき社会政策的視点を重視し、国民の支持を回復すべしという議論である。

スイリはジュルチャーニに代わる、社会党の首相候補の 1 人だ。総選挙間近になっても社会党の支持率が回復しなければ、究極の逆転のシナリオは、「ジュルチャーニが引退して、スイリが首相候補になる」という選択だろう。先は長いから、まだ何が起きるか分からない。あまり早く手を打つと、かえって墓穴を掘ることにもなるから、タイミングが難しい。

スイリは現在のような改革時代には向かないタイプの政治家だ。抜本的な財政改革や社会制度変革には、ジュルチャーニのような行動力と決断力が必要だ。スイリにはジュルチャーニのような能力はない。だが、改革が一段落すれば社会が安定を求める時が来る、その時がスイリの出番になる。

ジュルチャーニが潔くビジネスの世界に戻ることを宣言すれば、オルバンは敗退し、スイリが社会党が勝利することもありえよう。女性の力が男の道楽を制する時がくるだろうか。

(関連記事は、<http://morita.tateyama.hu> を参照されたい)